
はじめに

さて、本分冊の『「生活者の自治」を目指して』の内容について少しふれておきたいと思います。平成の20年間の編さん作業は難しいものでした。まず、行ったことは町民にとってどのような20年だったのかを聞き取りをしました。ちょっと前の思い出や、印象に残っている事柄を採集しました。その内容は、偶然にも行政執行の基本方針の3本柱の「産業振興」、「住民生活環境の整備」、「教育の充実」と符合しました。それにこの時期の大きな変換点である地方自治にあたる脇本町政下のまちづくりを重視しました。

現代史の難しさや、どのような方法で捉えるべきかを考えながら、町民の聞き取り調査を大学での演習の時間と連動しながら進めていきました。本分冊での執筆者に学生が担当した項目が多いのはそうした理由からです。その他のまちづくりでの難しいテーマについては私の親しい先生にお願いしました。特に本町の農業・漁業については専門の北海道大学の先生にお願いをしました。

知内町の平成20年間の展望する場合に大切な事は、日本や北海道との関連で捉えることが必要でした。そのことを[1]平成20年の全体像として提示しました。この時代のイメージを提供しています。[2]自立した地方自治をめざしては、この20年間の担った脇本町政の財政運営を中心に叙述しています。その期間の中で、これまで対象化してこなかったイベントについても検討をしています。[3]持続可能な地域社会をめざしては、大きな岐

路に立つ1次産業の農業と漁業についての現況と課題について叙述しています。『知内町史』ではほとんど記載がなかった知内火力発電所について、建設経緯を含め環境問題と地元の活性化との葛藤を垣間見えています。

[4]主体的な地域コミュニティをめざしては、生活分野でもっとも身近な話題である福祉や消費生活や町内会について叙述しています。この変動の激しい時期にどのように町の様子が変わっていったのかを探っています。[5]希望がもてる「開かれた学校」をめざしては、幼稚園から高校まで一貫教育を実践している独自の教育について重視しました。全国的な流れの中にある学校統廃合の問題や、地域と学校との関係性や甲子園出場を果たした知内高校の意義などを叙述しています。

本分冊で留意した点は、自治体史がどうしても行政史に成りやすい傾向にあるので町民主体に地域を表現できないかということを意識しました。町の事実だけだと町の様子が現在の社会とどのような関係にあるのかが希薄になってしまいます。私たちのこれからの方向性を見出すために研究者の考えも取り込むことにしました。脇本元町長の「平成の20年とはどんな時代でしたか」の答えは、「高度経済成長期の反省の時代かな」というものでした。現在は過去の経験の連続性にあることを示唆した言葉だと思います。本分冊は、この20年の時間軸を解釈するというよりも、現代に生きる町民の様子と課題とを記録化する作業だったと思っています。 [根本直樹]